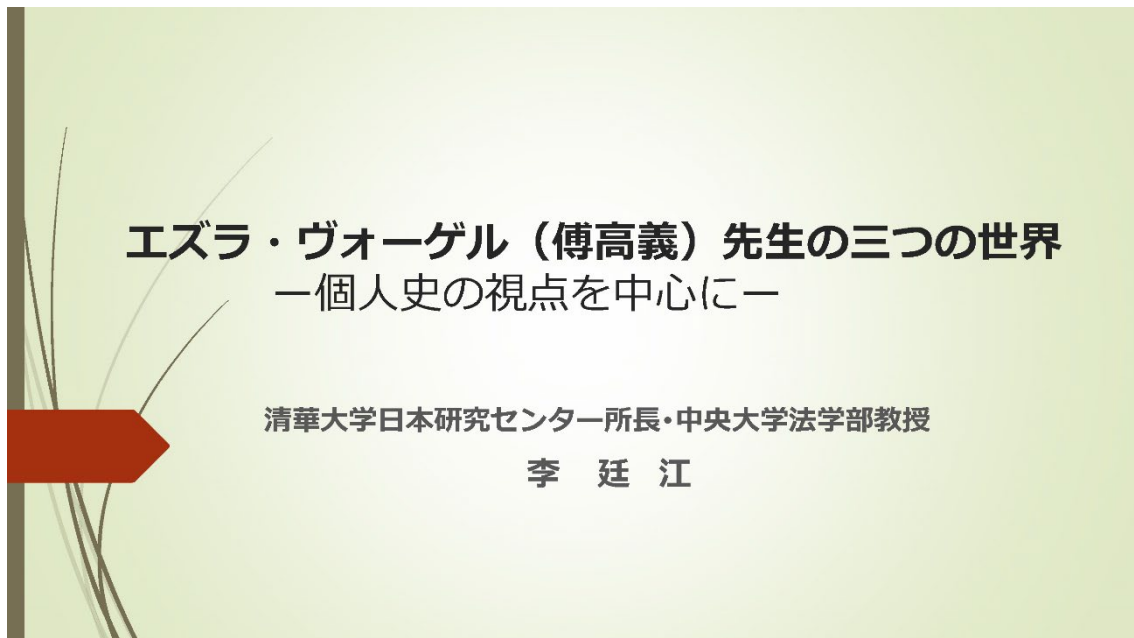


第2回エズラ・ヴォーゲル記念フォーラム
「アジア研究の過去・現在・未来（そのⅡ）」
〈パネラースピーチ〉

エズラ・ヴォーゲル（傅高義）先生の三つの世界
— 個人史の視点を中心に —

李廷江

（清華大学日本研究センター所長・中央大学法学部教授）



ご紹介にあずかりました李廷江と申します。本日は愛知大学で開催されていますエズラ・ヴォーゲル（Ezra F. Vogel, 中国名：傅高義）先生を記念するフォーラムに参加させていただき、大変光栄に存じます。愛知大学は、私にとって大学院時代からの学びの場であり、また日本で教職に就いた後も、先輩や後輩たちと共に学术交流を深めてきた大切な場所でございます。

故ヴォーゲル先生のご縁により、愛知大学では昨年、先生の蔵書の寄贈を受け、「エズラ・ヴォーゲル文庫」が創設されました。昨年も本フォーラムに参加させていただき、今年もまたこのような貴重な機会をいただき、心より感謝申し上げます。本日は少し重い気持ちで参加させていただいております。また、さきほど國分先生、ダイク先生のご講演を拝聴し、深い感銘を受けました。



私がヴォーゲル先生に初めてお会いしたのは、1981年、研究者になりたての頃、北京でのことでした。その翌年に私は日本に留学し、留学生時代には國分先生と共に東京の国際文化会館で「中国社会科学研究会」を立ち上げました。この研究会では、ヴォーゲル先生に2度にわたり、ご講演いただいたことがあります。その後、日本で教職に就き、さらに清華大学日本研究センターの活動にも携わるようになり、ヴォーゲル先生との交流は実に40年以上にも及んでおります。この間、知的交流や学術交流を通じて、中日米関係に関する活動に関わってまいりました。今日は、私個人の視点から見たヴォーゲル先生について、ご報告させていただきたいと存じます。

本日の報告は、次の4つのテーマに分けてお話しいたします。

1 つ目は、ヴォーゲル先生のご逝去が東アジアにどれほど大きな衝撃と影響を与えたかについてです。

2 つ目は、ヴォーゲル先生が如何にアジア研究において重要な存在であったか、その意義を整理してみたいと思います。

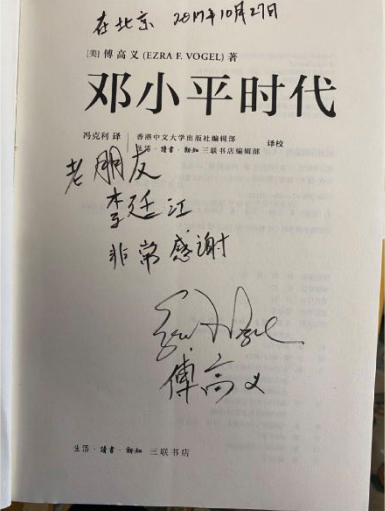
3 つ目は、清華大学とヴォーゲル先生の関係について振り返りたいと思います。

最後に、私が行ってきたオーラルヒストリー研究の一環として、20 数年前にヴォーゲル先生に行ったインタビューの録音の一部をご紹介します、それを通じて先生の人生の原点について考えてみたいと思います。

I. エズラ・ヴォーゲル先生の精神的遺産

— エズラ・ヴォーゲル先生の精神的遺産

- エズラ・ヴォーゲル先生の学術的真髓と精神的遺産とは何でしょうか？私の浅薄な理解では、三つあります：一つ目は共感的な関心、二つ目は理性的な研究、そして三つ目は積極的な交流への参加です。
- ヴォーゲル先生は「行動派の学者、思想の伝道師」と称されています。彼の最大の魅力の一つは、中日両国の指導者とも、街中の一般市民とも対等に交流できる思想家であるという点です。



まず、ヴォーゲル先生のご逝去が東アジアにどれほど大きな衝撃と影響を与えたかについてです。

ヴォーゲル先生が亡くなられてから、私はさまざまな形で記念行事を行ってまいりました。過去のメールや資料を読み返すたびに、先生のご指導や温かいご支援を思い出したりします。私が考える先生の精神的遺産と学術的真髓は、以下の3点に集約されます。

- 1つ目は、人に対する深い関心。
- 2つ目は、理性的な研究に徹底した姿勢。
- 3つ目は、行動派の学者として積極的に参画する態度です。

ヴォーゲル先生は「行動派の学者」、「思想の伝道師」として知られ、特に中日両国の指導者から一般市民まで、誰に対しても対等に接する姿勢が多くの人々を魅了してきました。その思想と行動力こそが、先生の大きな遺産であると確信しております。

そう考えるとき、我々がアジア研究を語る際に、ヴォーゲル先生がいらっしゃらないということは如何に寂しく、無念なのかを痛感いたします。ヴォーゲル先生は、常に大きな問題意識を抱きながら、学問が如何に社会に関与し、どのようにして真の平和が実現できるのかを追求してこられました。

II. アジア研究とヴォーゲル先生

二 アジア研究とヴォーゲル先生

- アジア研究を語る際に、ヴォーゲル先生がいないと、何とも言えない寂しさと無念さを感じます。ヴォーゲル先生は現代のアジア研究の著名な学者であり、先生のアジア問題に対する考察が重要な切り口になっています。ヴォーゲル先生の学問の軌跡をたどりながら、その学術的な影響を理解することは、学問的にも現実的にも重要な意義があります。
- 2008年に清華大学日本研究センターが設立されて以来、ヴォーゲル先生と清華大学の長年にわたる交流を通じて、彼がどのように中国の大学と付き合い、どのように行動してきたのかを、同僚として、そして友人として知ることができました。彼がどのように立場を変えて考え、皆と共に学問と社会問題を深く探究し、時代の精神と人生の価値感を研究し、正義と平和の意義を追求してきたのかを知ることができました。

アジア研究とヴォーゲル先生（続き）

ヴォーゲル先生は尊敬されている学者であり、また、平和を愛する普通のアメリカ人でもあります。世界が戦争の危機に直面している今、私たちはヴォーゲル先生を偲ぶと同時に、彼の学術研究における「求实」の精神、平和の理念及び初心を貫く姿勢を学ぶ必要があります。彼の思想のともしびを受け継ぎながら、彼が期待していた、中日両国が平和で永遠の隣人になるという理想とビジョンを実現しなければなりません。

- 今、東アジアの社会には多くの危機が存在しています。実際のところ、最大の危機の根源は人々の交流の欠如にあると言えます。上層部の接触の欠如、学界の交流の欠如、民衆の往来の欠如が挙げられます。学問と現実がどう結びつくかに関しては、ヴォーゲル先生はまさに私たちのお手本です。
- もしヴォーゲル先生がご健在なら、彼はどのように行動するのでしょうか？恐らく彼はこう言うでしょう。「困難であればあるほど、学者は役割を果たす必要があります。学術交流を強化することでしか現状を打開できず、全方位の対話を展開することでしか共通点を見出し、危険を回避することができません。」

現在、東アジアの社会には多くの危機が存在しています。その最大の原因は、交流そのものが不足していることにあるのではないのでしょうか。我々がこうして共通の課題に直面しながらヴォーゲル先生を偲ぶなかで、もし先生がここにおられるとしたら、なにをおっしゃるのでしょうか。恐らく先生はこう語られるはずで、「困難であればあるほど学者の役割が重要であり、学術交流の強化こそが現状を打開する鍵である」。そして、「全方

位の対話を通じて共通点を見出し、危機回避の道を探らなければならない」と強調されるでしょう。

ヴォーゲル先生が亡くなられたのは、コロナパンデミックの最中であり、中米関係が日に日に悪化していた時期と重なりました。そのような激動の時代にあつて、先生の急逝は多くの人々に重く受け止められました。したがって、先生の死がもたらした衝撃や、先生がご存命だった時代の意義を振り返るといふことは、我々にとって改めて考え直す貴重な機会にもなっていると思います。先生の残された精神的遺産とその真髓について、我々は日々深く考えるべきだと思っております。

では、ヴォーゲル先生の精神、研究方法、そして残された遺産とは何なのでしょう。私の理解では、先生の特筆すべき特徴は、常に現実に対して問題意識を持ちながら、真摯に歴史に学び、新たな未来を切り拓くという姿勢にあつたのではないかと思います。

次に、ヴォーゲル先生が如何にアジア研究において重要な存在であつたのか、その意義について整理してみたいと思います。

先ほどフェアバンク (John Fairbank, 費正清) 先生やシュウォルツ (Benjamin Schwartz, 史華慈) 先生のお話が出ましたが、1967年に朝日新聞が「激動の中国」という特集を掲載されました。その特集には、アメリカを代表する7名の学者が登場し、当時37歳のヴォーゲル先生もその一人としてデビューし、堂々と自身の見解を述べておられました。今振り返ると、これは非常に意義深いことだと思います。以下は、1967年当時のインタビューに登場した学者のリストです。

朝日新聞 [特集] 激動の中国 (1967年2月12日)
米の七専門家に聞く文化大革命と紅衛兵

.....

- 米国の中国研究第一線で活躍する7人の専門家へのインタビュー：
- ジョン・フェアバンク ハーバード大学教授・同東アジア研究所所長(外交史)
- ハンス・モーゲンソーン シカゴ大学教授・同外交政策研究所所長(国際政治)
- ベンジャミン・シュワルツ ハーバード大学教授(思想史)
- ドナルド・ザユリア コロンビア大学教授(国際関係論)
- ハロルド・ヒントン ジョージ・ワシントン大学教授(同)
- ティビット・ロー エール大学教授(政治学)
- エズラ・ボージェル ハーバード大学講師(政治社会学)
- 以上の七氏に個別にインタビューを行い、中国の現状、その将来の見通し対外的影響などについて、詳しく意見をただした。

もう一つの記事があります。実は、私は現在、1975年のフォード米大統領の訪中に関する調査を行っております。外交資料館に所蔵されている関連資料を調べたところ、ヴォーゲル先生に関する資料を1点発見いたしました。当時、ハーバード大学国際問題研究所に

て研修中だった佐藤嘉恭書記官（後に中国大使）が、ヴォーゲル先生に対してインタビューを行い、フォード訪中についての意見を伺ったときの記録です。

ヴォーゲル先生が述べられた4つの意見はいずれも非常に重要なものでした。その内容は以下のとおりです。

- フォードの訪中は米国内政的にも、フォードにとって大きなプラスになる。
- 中国の内政事情に関する説明。
- 中国側の最大の狙いは、米国による北京政府の正式承認である。
- 米国は、北京を承認すれば台湾と断交せざるを得ず、台湾関係に問題が生じる。

フォード訪中と米中外交関係樹立の可能性(1975年)

- 「現在ハーバード大学国際問題研究所にて研修中の佐藤嘉恭書記官より、同書記官が3日ハーバード大学東アジア研究所所長のヴォーゲル教授より聴取したところとして、本件に関し、『今秋のフォードの訪中は米政府が北京承認の方向を打ち出すために仕組まれた政治的ドラマとしてとらえられるべきものと自分は見る』とする同教授の極めて示唆に富む内話の内容を当館あてに提供したので、右何ら御参考まで下記のとおり報告申し上げます。

記

- 1 フォードの訪中は米国内政的には、フォードの大きなプラスになるであろう。
- 2 他方国内の情勢は先般の新体制誕生にも拘わらず依然複雑であり、周恩来は米中関係に大きな前進が見られないことにつき御承知のとおりつきあげを喰っており、穏健派が大勢を占めた新体制は米国側からの積極的な反応、推進がない場合にはつらい立場にたたされることだろう。
- 3 中国側の最大の狙いが米国による北京政府の正式承認であることは云うまでもない。
- 4 さて問題は米華関係である。北京を承認すれば勿論台湾との外交関係は断たざるを得ない。」
(外交資料館資料・フォード訪中)

朝日新聞の報道：フォード米大統領訪中（1975年）

01	1975年(昭和50年)10月08日【東京朝刊7頁1段】	フォード訪中 悲観と楽観 「台湾」進展 望み薄 交流拡大、一定の成果も……………	1
02	1975年(昭和50年)10月22日【東京朝刊1頁11段】	フォード訪中日取り決定か_訪中日程……………	2
03	1975年(昭和50年)10月25日【東京朝刊7頁1段】	トウ路線安定化に寄与 フォード訪中で視測_中国訪問……………	3
04	1975年(昭和50年)11月04日【東京夕刊1頁9段】	フォード訪中の米側日程案、中国側が拒否 先遣隊出発見合わせ……………	4
05	1975年(昭和50年)11月06日【東京朝刊7頁9段】	フォード訪中日程は四日間_米中首脳会談(フォード訪中)……………	5
06	1975年(昭和50年)11月13日【東京夕刊2頁1段】	米大統領の訪中日程 米中間で合意成立 来月上旬の四、五日滞在?……………	6
07	1975年(昭和50年)11月14日【東京朝刊1頁6段】	フォード大統領の訪中 来月一日から五日間 中国発表……………	7
08	1975年(昭和50年)11月14日【東京夕刊2頁1段】	正常化印象づけ・中国 フォード大統領訪中 現状維持ねらう・米国……………	8
09	1975年(昭和50年)11月14日【東京夕刊2頁3段】	ともに対ソ関係に焦点_米中首脳会談(フォード訪中)……………	9
10	1975年(昭和50年)11月20日【東京朝刊7頁9段】	先遣隊40人が北京着_米中首脳会談(フォード訪中)……………	10
11	1975年(昭和50年)11月29日【東京朝刊7頁5段】	きょう訪中の途 経済面での成果を期待_米中首脳会談(フォード訪中)……………	11
12	1975年(昭和50年)11月29日【東京夕刊2頁1段】	重要問題で意見交換 主にトウ副首相と会談 米中首脳会談(フォード訪中) / 米国……………	12
13	1975年(昭和50年)11月29日【東京夕刊2頁6段】	一日午後北京着_米中首脳会談(フォード訪中)……………	13
14	1975年(昭和50年)11月30日【東京朝刊1頁6段】	米大統領、訪中へ出発_米中首脳会談(フォード訪中)……………	14
15	1975年(昭和50年)11月30日【東京朝刊7頁1段】	米中会談 焦点「ベトナム後のアジア」 影響とソソ連の進出……………	15
16	1975年(昭和50年)12月06日【東京朝刊7頁4段】	フォード訪中の足跡 米中、呼吸びつたり “小異” 越え一致点評価……………	16

これらの意見を裏付けるように、1975年当時の朝日新聞のフォード訪中の関連記事を読むと、ヴォーゲル先生が提起された問題の多くは現実に当たっていたことが分かります。

以上のように、1967年の文化大革命に関するヴォーゲル先生のご発言とご見解、1975年のフォード訪中に関するご意見を紹介させていただきました。よく考えると、その後の先生の代表作である『ジャパン・アズ・ナンバーワン』や『中国の実験—改革下の広東—』は、常に時代の要請に応える形で書かれていたことが分かります。先生は一貫してそのような姿勢で行動され、我々の後進には研究のお手本を示してくださいました。

特に『ジャパン・アズ・ナンバーワン』は、中国でも大きな反響を呼び起こしました。1981年、ヴォーゲル先生が中国社会科学院を訪問された際に、この本の内容を中国語で説明された時の様子を今でも鮮明に覚えております。私は最前列に座り、録音を担当しておりました。この時のご縁はその後長く続きました。ヴォーゲル先生の学問への姿勢は、歴史から現在、そして未来へと、生涯にわたり貫かれていたと思います。その後の先生の代表作として、『現代中国の父 鄧小平』や『日中関係史』などが挙げられます。

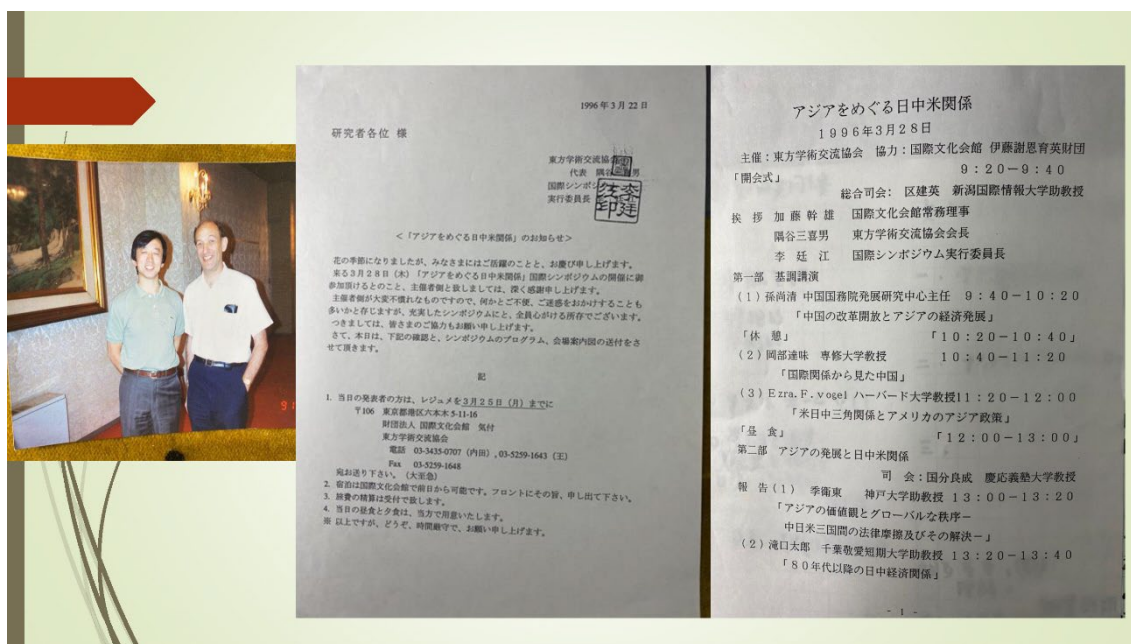


さらに、1990年の江沢民国家主席の訪日において、多くの課題が残されました。ヴォーゲル先生はそれらの問題に対して詳しく検討されました。1997年に江沢民国家主席が訪米した際に、ヴォーゲル先生のご尽力により、江主席のハーバード大学訪問と講演会が成功裏に実現されました。このように常に問題意識を持ちながら、日々努力している姿勢こそ、ヴォーゲル先生の大きな特徴なのではないかと思えます。

ヴォーゲル先生のもう一つの特徴は、単なる象牙の塔の学者ではなく、幅広い領域を涉猟しながら、大きなスケールで研究を展開されたところだと思います。これは先生の自信の現れであると同時に、主要な分野で確実な成果を挙げられた証でもあります。

また、胡耀邦の伝記を書く際に、多くの関係者たちに直接会い、インタビューを重ねるという徹底した方法を取られました。この過程において、清華大学の学長や私自身も一部同行させていただきました。それは私には到底真似できない研究姿勢です。先生の存在が如何に大きく、稀有なものであるかを強く感じておりました。

私は1992年以降、2回にわたり計4年間ハーバード大学に滞在し、研究に取り組んでまいりました。その期間中、ヴォーゲル先生との交流を深め、多くのことを学ぶことができました。次の写真は、1991年に撮影したヴォーゲル先生とのツーショットです。1992年にハーバード大学を訪ねた際、先生は「そろそろ政府の仕事をするけれども、2年後に一緒にアジア問題についてなにかやりましょう」と約束してくださいました。



その結果、1996年3月、中日米のアジア政策に関する国際会議が東京の国際文化会館で開催されました。当時の代表者は、アメリカ側がヴォーゲル先生、中国側が中国国務院発展研究センター主任の孫尚清 (Sun Shangqing) 先生、日本側が岡部達味先生や國分先生といった顔ぶれでした。この会議は、おそらく中日米のアジア政策に関する最初の国際会議だったのではないかと思います。

また、2013年9月に、ヴォーゲル先生が中日関係の打開策に関する英語でまとめた提案を発表されました。ヴォーゲル先生は、歴史・現在・未来といった「三位一体」の視点で学術研究を進められ、世界の人々と交流することの重要性を教えてくださいました。

ヴォーゲル先生：日中関係改善のための提案（2013年9月）

Suggestions for Improving Sino-Japanese Relations, September 2013
Ezra F. Vogel, Harvard University

If both China and Japan wish to improve relations, I suggest they consider:

Beginning Now


- Japan should avoid actions China considers provocative. Japanese top leaders should not visit Yasukuni Shrine and should reaffirm Japan's apologies for tragedies caused by their invasions.
- China should not use armed pressure in an effort to determine the sovereignty of territories claimed by Japan and should reaffirm its determination to prevent demonstrations against Japanese.
- Chinese and Japanese representatives should seek a formula so both sides could withdraw from confrontations over territorial disputes such as the Senkaku/Diaoyu islands, and affirm their determination to resolve these issues peacefully at a later date.
- Both sides should select a small number of high level leaders likely to play an important role in their government for many years ahead. These leaders, representing their respective countries, should meet frequently for comprehensive discussions on a broad range of issues to strengthen mutual understanding and cooperation. Japan should select leaders representing major political parties so that whichever political party is in power policies could continue without interruption.

Over the Next Several Years

- Japanese leaders should prepare a statement (several tens of pages) stressing their many contributions to peace since World War II. Japan could emphasize its renunciation of military action; contributions to developing countries; to the United Nations and to other international organizations; limitation of defense expenses to one percent of GDP; restraint in producing nuclear weapons; and refusal to send troops abroad to undertake military actions. Japan should prepare a statement of similar length summarizing its role in other Asian countries since the Meiji era, including an objective account of the suffering it caused by

China should reduce the national presentations that inspire hostility to Japan in their movies, books, TV and increase the public recognition of Japan's contribution to China's modernization since 1979 and publicize the Japanese commitment to peace since 1945. China should return to the policies of the 1980s under Deng Xiaoping introducing Japanese literature, movies, TV, and other products of Japanese culture on a wide scale.

Exchange programs between Chinese and Japanese people should be greatly expanded.



<訳訳> 日中関係改善のための提案、2013年9月
ハーバード大学、エズラ・ヴォーゲル

もし日中両国がその関係を改善したいと望むなら、私は両国が以下のことを熟慮するよう願います。

直ちに実行すべきこと

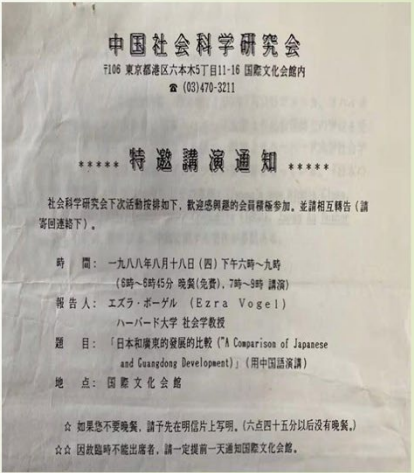
日本は、中国の歴史教科書とその他のメディアで中国に敵意を煽るような内容の書籍や映画を削減すべきです。また、1979年以降の日本が中国の現代化に果たした貢献を公認し、1945年以降の平和への日本への公約を宣伝すべきです。中国は、日本が中国の現代化に果たした貢献を公認し、1945年以降の平和への日本への公約を宣伝すべきです。中国は、日本が中国の現代化に果たした貢献を公認し、1945年以降の平和への日本への公約を宣伝すべきです。

両国は、今後数年間にわたって互いにそれぞれの政府内で重要な役割を担う可能性の高い

Ⅲ. エズラ・ヴォーゲル先生、人生を語る

三 エズラ・ヴォーゲル先生、人生を語る (2000年1月20日・日本国際文化会館にて)

- 【エズラ・ヴォーゲル】（肉声）：（故郷は）オハイオ州のオハイオ・ウェスリアン大学（Ohio Wesleyan University）のある自然豊かな、デラウェアです。当時の人口は1万足らずという小さな町です。僕の父は1924年にそこへ移住し、母と1928年に結婚して、僕は1930年に生まれました。僕は小さな町の、キリスト教の雰囲気の中で育てられたのです。その大学はもともとキリスト教との関係があつて、メソジスト（Methodist）という宗教です。
- 小さい時、その町にアジアへ行った事がある宣教師がいました。中国に住んでいた宣教師、韓国に住んでいた宣教師がいたわけです。ですから、子供の頃、僕はアジアについて大体宣教師から聞きました。そういう宣教師の見方は、どちらかというと、アジア人にすごく同情し、賢い人もいっぱいいるけれども、やはりお金もない、かわいそうな環境だったということです。それから、第二次世界大戦の時に、攻撃を与えたのは日本だったということで、中国に同情したのです。ですから、子供の頃から中国人と韓国人に非常にウェットな感じをいただき、そういう考えがあつたのです。



中国社会科学研究会
#100 東京都港区六本木5丁目11-16 国際文化会館内
☎ (03) 470-3211

******* 特邀講演通知 *******

社会科学研究会下次活動挨拶如下、歡迎感興趣的會員積極參加。並請相互轉告（請寄回連絡下）。

時 間：一九八八年八月十八日（四）下午六時～九時
（6時～6時45分 晚餐（免費）、7時～9時 講演）

報告人：エズラ・ヴォーゲル（Ezra F. Vogel）
ハーバード大学 社会学教授

題 目：『日本和廣東的發展的比較（A Comparison of Japanese and Guangdong Development）』（用中国語演講）

地 点：国際文化会館

☆ 如果您不要晚餐，請于先在明信片上写明。（六點四十五分以後沒有晚餐。）
☆☆ 因此臨時不能出席者，請一定提前一天通知國際文化會館。

65

エズラ・ヴォーゲル先生、人生を語る（続き）

（2000年1月20日・日本国際文化会館にて）

- それから、私の父は小さい町のインテリ階級で、規模は小さいですが店を持っており、住民と非常にいい関係にあったので、商売も非常にうまくやっていました。今の中国の個人商店より大きいくらいの規模の店を2つ持っており、雇い人も退職時には30人から40人ぐらいいたかもしれません。父が言ったのは、人々とのいい関係をつくるのが重要だということです。
- ヨーロッパでは、やはりユダヤ人に対する偏見が多くて、非常に危ない、危険があります。ですから、父は同情して、できるだけいい人間関係をつくりたいと、必要以上に気遣い、配慮していました。また、町の郊外に住んでいる農民や普通に働いている人達と、ものすごくいい関係ができて、なにか社会に貢献するために寄付を集めるとか、教会のために集めるとか、なにか社会のためと言って、父はいろいろな貢献をしたのです。
- 僕はキリスト教の人達、農民、一般労働者等と、すごくいい関係にあります。アメリカのお金持ちの家に生まれたインテリ階級は、英才教育のために、例えば、ボストン郊外のエリート学校に入学したりするのです。しかし、僕はそうではなかったのです。大体、僕が目から見ると、アメリカ人は幸せです。 <音声終了>

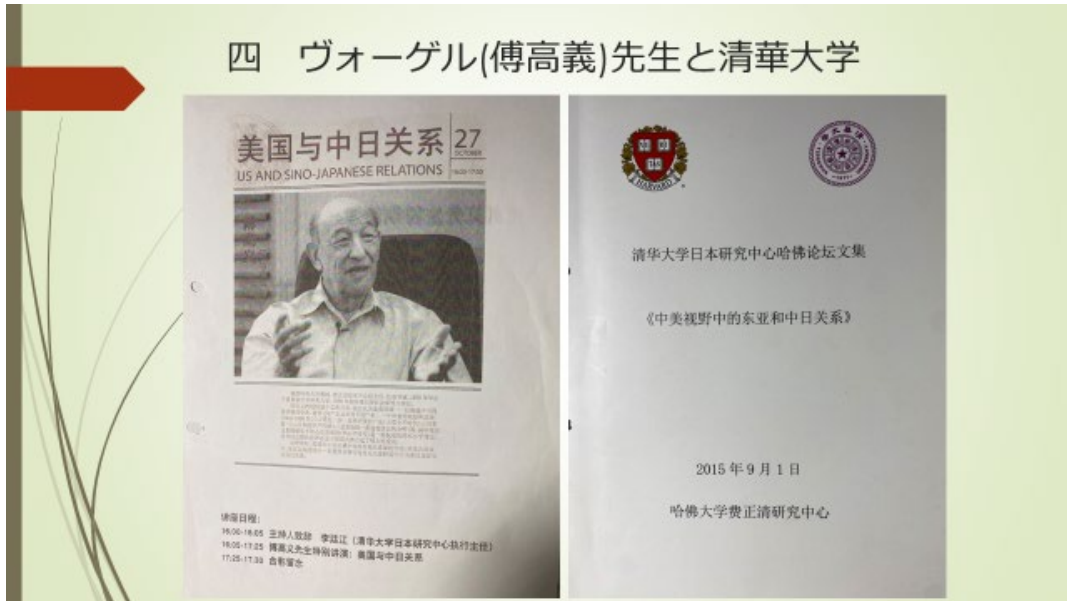
次に、オーラルヒストリー研究の一環として、20数年前にヴォーゲル先生に対して行ったインタビューの録音の一部をご紹介します。

【エズラ・ヴォーゲル先生の肉声】

「私の故郷はオハイオ州の自然豊かなデラウェアという町で、そこにはオハイオ・ウェスリアン大学がありました。当時の人口は1万人足らずの小さな町でした。父は1924年にそこに移住し、母と1928年に結婚しました。私は1930年に生まれましたが、この小さな町でキリスト教の影響を受けながら育ちました。アジアについては、町に住んでいた中国や韓国に行ったことのある宣教師から話を聞いてきたので、幼少期からアジア人に対する親近感を抱いていました。父は町のインテリで、住民と良好な関係を築きながら、少し大きな規模の店を経営し、社会に多くの貢献をしました。そうした環境のなかで育ったことが、私自身の価値観の形成に大きな影響を与えてくれたと思います。」

このエピソードを聞いて改めて思ったのは、連携の重要性です。例えば、ヴォーゲル先生は江沢民国家主席の訪日を重視され、國分先生とも議論を重ねられた結果、江沢民国家主席の訪米時にはハーバード大学での講演会を成功に導かれました。また、ヴォーゲル先生からは、目先の結果を急ぐのではなく、努力すれば必ず達成できるという期待を共有しながら、それを実現することの重要性を学ぶことができました。

IV. ヴォーゲル（傅高義）先生と清華大学



最後に、清華大学とヴォーゲル先生の関係について振り返りたいと思います。

清華大学を「第二の家」と見ておられたヴォーゲル先生が亡くなられた際に、清華大学の関係者たちも深い悲しみに包まれました。そして、先生を継承し、新たな中日米関係を構築するために、「エズラ・ヴォーゲル記念講座」が開設されました。その背景には、関係者たちの共通した思いがありました。ヴォーゲル先生は清華大学で学生との交流においては、「学問とはなにか」を丁寧に教えられる一方で、研究者との間では真剣な議論を繰り広げられました。


ヴォーゲル先生と清華大学

《傅高义纪念讲座》12讲

举办时间	学术活动名称	主讲人
2021/1/23	《傅高义纪念讲座》第1讲--“拜登时代的中美关系”	赵全胜
2021/2/28	《傅高义纪念讲座》第2讲--“亚洲性与普遍性”	孙歌
2021/3/28	《傅高义纪念讲座》第3讲--“第一次世界大战与中日共有历史”	徐国琦
2021/4/25	《傅高义纪念讲座》第4讲--“爱国者治港——在“仁爱”与“博爱”两种关系之间辩证	石之瑜
2021/5/23	《傅高义纪念讲座》第5讲--“大变局下的东亚”	张蕴岭
2021/6/27	《傅高义纪念讲座》第6讲--“联动的东亚与“复合国家”类型化”	白永瑞
2021/8/29	《傅高义纪念讲座》第7讲--“民族研究的超民族视角”	汪晖
2021/9/24	《傅高义纪念讲座》第8讲“世界大变局下中日经济关系面临转型”	张玉来
2021/10/24	《傅高义纪念讲座》第9讲“幕末明治时代的日本对西方冲击的回应——根据关键人物和原始史料所做的考察”	陶德民
2021/11/21	《傅高义纪念讲座》第10讲“中苏同盟的兴衰——关于社会主义阵营内部国际关系的解析”	沈志华
2021/12/11	《傅高义纪念讲座》第11讲“越左と共創の間で——中日米の文化交流における三角関係——”	山室信一
2021/12/21	《傅高义纪念讲座》第12讲“日中間係について”	西村阳一

汪晖对话傅高义：毛泽东与邓小平时代

- 2014-09-09 澎湃新闻网
- 9月4日下午，一中西两位著名学者，在清华大学展开了对话，讨论“历史视角下的中国变革”，他们是汪晖教授与傅高义教授。
- 汪晖是清华大学中文系、历史系双聘教授，《现代中国思想的兴起》一书作者。傅高义 (Ezra Feivel Vogel) 是哈佛大学社会学荣休教授，费正清东亚研究中心原主任，《邓小平时代》一书作者。
- 对于总结新中国六十年来历史经验，汪晖教授与傅高义教授都可谓最具宏观视角的学者。虽然二人也因此成为争议人物，但必须承认，目前在前三十年与后三十年的关系、如何处理毛泽东时代的重要遗产、当前改革开放的结构性问题为何等问题上，他们依然是最具深刻洞见的学者。
- 二人虽对当下中国的发展情况都以乐观为主，但在具体历史问题的评价上，依然有诸多交锋。澎湃新闻 (www. thepaper. cn) 整理了其中重要观点。



- 汪晖对话傅高义：历史视角下的中国变革 如何评价新中国六十多年历史？
- 讲座前半场，傅高义教授重述了他对于毛泽东、邓小平二人历史功绩的评价，对于毛泽东的历史评价，主要集中在其统一国家的功绩上，批评了毛泽东在土改和“文化大革命”中的错误。而对于邓小平的评价却可以用“盛赞”来形容。

特に私にとって強く印象に残っているのは、先生がおっしゃった「永遠の隣人」という言葉です。この言葉自体は、中国の外交官・張香山 (Zhang Xiangshang) 氏が出版した本のタイトルにもなっているのですが、ヴォーゲル先生がこの言葉を広められ、今では中日関係を象徴する共通語になっています。

今後、我々はヴォーゲル先生の研究と指導を基に、活動の範囲を中国や日本だけでなく、アメリカにも広げていくべきだと考えております。ハーバード大学では清華大学日本研究センターの講座が開設されたことや、中央大学がヴォーゲル先生に名誉博士号を授与したことは、その具体的な成果と言えるでしょう。これからもヴォーゲル先生の業績を高く評価し、次世代へ引き継いでいきたいと願っております。

ヴォーゲル先生と最後にお会いしたのは、2019年12月22日、東京の国際文化会館で行われた中央大学名誉博士学位贈呈式のときでした。その席で、私はヴォーゲル先生を紹介

する役目を務めさせていただきました。その後も先生とメールで連絡を取り合い、2020年11月には「ぜひオンラインでご講演をお願いしたい」とやり取りをしておりました。

ある日突然、ヴォーゲル先生から「来月、小さな手術を受ける予定なので、講演の日程を12月20日以降にしてもらえないか。ただ、無理に合わせる必要はないよ」とのご連絡をいただきました。そして最後のメールには、「1月6日か7日で構わないよ」と記されており、また、私が深圳に行く予定だとお伝えしたところ、「どうぞ深圳を楽しんでください」という温かいお言葉も添えられていました。



*中央大学は2019年11月22日（金）に、ハーバード大学名誉教授のエズラ・ヴォーゲル氏に名誉博士号を授与しました。ヴォーゲル氏は、戦後東アジアにおける政治、経済、社会の変化に関する優れた研究を成し遂げ、特に日本と中国の研究において顕著な業績を残しています。過去において日中関係が困難な側面を持つ中で、ヴォーゲル氏は多数の国際共同研究を行い、科学的かつ建設的な提案を行ってきました。彼はアジアの理解と平和構築に貴重な貢献をしています。この名誉博士号は、ヴォーゲル氏の研究成果と貢献を認めるものです。また、ヴォーゲル氏は清華大学日本研究センターの学術顧問でもあります。彼は中央大学、ハーバード大学、清華大学の間での学術交流のさらなる発展を期待しています。



エズラ・ヴォーゲル先生 中央大学名誉博士学位贈呈式ならびに記念講演会における挨拶
(李廷江、2019年11月22日)

エズラ・ヴォーゲル先生 ご来場の皆様 こんにちは。
ご紹介を賜りました李廷江と申します。まず、本日の記念講演会の共催者であります清華大学を代表して、ご多忙の中、ご来場の皆様に、改めて厚くお礼申し上げます。

このたび、ヴォーゲル先生の日中関係史の大著『China and Japan: Facing History』(『日中関係史: 1500年の交流から読むアジアの未来』)が刊行され、また来月19日には日本語版『日中関係史 1500年の交流から読むアジアの未来』が日本経済新聞出版社より発売されることとなりました。このご著書は東アジア研究の新しい地平線を切り開き、先生の学問の一つの到達点を示すもので、誠に喜ばしいことであり、心よりお慶び申し上げます。

いまからちょうど40年前の1979年にヴォーゲル先生は代表作『ジャパン・アズ・ナンバーワン』を発表され、日本の発展と成功の秘密を探求し、日本、中国ならびに東アジアの知的世界で話題をわきおこすベストセラーになりました。それ以来、激動の40年の間、先生のご研究は、常に時代の呼びかけに答え、東アジアの平和的進路に深い洞察を示してこられました。

2013年にはヴォーゲル先生は、中国改革開放の源泉を分析した『現代中国の父 鄧小平』を出版され、中国でも百万部が発行されるベストセラーとなり、高く評価されました。先生は、中国研究、日本研究、そして東アジア研究の分野において、大きな業績と影響力を持つ、学術上の国際的且つ指導的な存在であります。

清華大学の学術顧問を務められていたとはいえ、ヴォーゲル先生はすでに 90 歳というご高齢でした。にもかかわらず、先生はいつも仕事を優先して考え、常に職務に心を砕いておられました。特に深圳や中国に対する先生の深い愛情を、そのメールを見るたびに思い出し、非常に感慨深いものがありました。

本日は、ヴォーゲル先生との個人的な関わりを軸に、先生の世界観についてお話しさせていただきました。先生との交流は 40 年にわたり続いてきましたが、その歴史を振り返るなかで強く思ったのは、先生の時代が決して順風満帆ではなかったということです。中米間の国交がなかった時代、天安門事件など多くの困難があったなかで、先生の存在感がひととき際立っておられました。天安門事件以降も、先生と深い交流を続けておりました。

最後に、ヴォーゲル先生の教え子であり、現在香港大学で教えておられる徐国琦さんと、先生のご功績について話し合いながらまとめたメッセージを皆さまと共有させていただきます。

エズラ・ヴォーゲル先生の時代は一区切りを迎えましたが、新しい時代において、先生がその生涯を通じて体現された家訓や平和の理念を如何に継承していくかが、私たちに課せられた大きな課題であると感じております。そのために、何としてでもこの理念を受け継いで、次世代に伝えていかなければならないというのが、私の今の心境です。

最後に、ヴォーゲル先生への心からの感謝を表し、私の報告を締めくくらせていただきます。本日はご清聴、誠にありがとうございました。

エズラ・ヴォーゲル先生へのメッセージ

- かつて小さな町で生まれた青年が、決して自分を特別な人間と思わず、鋭い感性を露わにせず、謙虚な姿勢に徹し、世界に豊かな学術的遺産を残してくれました。彼は開かれた国際的な視野を持ちながら、現実問題に対しても強い関心を寄せており、さらに深い同情心も併せ持っておられました。彼は真摯に学び、中国や日本を深く研究され、アメリカを愛し、特に中米、日米、中日の関係が悪化することを懸念されており、世界がより良くなることを心から望んでおられました。彼は努力を惜しまず、生涯にわたって執筆を続け、命が続く限り研究を続けておられました。このような「仁愛」に満ちた心と学者のスピリッツには、私たちは心から敬意を表します。エズラ・ヴォーゲル (Ezra Vogel、傳高義) はその生涯を通じて、第二次世界大戦、冷戦、そして、アジアの台頭を体験されました。彼が亡くなられた時、彼が心を砕いて見守り続けてきたアメリカ、日本、そして中国は、大きな変革と試練に直面しており、中米関係、中日関係も大きく変化していました。この大きな挑戦と「百年に一度の変革」にどう対処するかは、私たち一人一人が考え、答えを出さなければならない課題だと思います。中日米関係を研究する学者として、私たちはさらに重い責任を担っていると自覚しております。ヴォーゲル先生の生涯にわたる探求の姿勢と、それを支える強い道徳心は、まさに私たちが学ぶべきお手本です。

——李廷江 (清華大学) ・徐国琦 (香港大学)